
バカとテストと召喚獣～死神刹那の学園生活～

マセリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと召喚獣〜死神刹那の学園生活〜

【Nコード】

N5759Z

【作者名】

マセリ

【あらすじ】

文月学園に入学した、とある二人の特級危険人物。それは、悪鬼羅刹と死神刹那の二人組。学園長さえも青ざめさせる二人だが、彼らには究極の弱点があった？

「翔子！？ 待て、俺は見えてないぎゃあああああ！」

「え、ちょ、優子待って？ 俺の関節はそっちにはぎゃあああああああ！」

そんな彼らの、DSでDM？な学園ファンタジー開幕！

〜この作品は、作者の残念な脳みそを主成分にできています〜

001 プロローグ（前書き）

うん、とあるの方も書かなきゃなのにな？

001 プロローグ

「翔子を返せエ！」

それは、とある夏の夕暮だった。人気のない廃工場に差し込む西日は、もう既にか細く揺らめいていた。

たった一人の幼馴染を人質に取られ、隣町では最強とまで言われたその巨躯の少年はもはや満身創痍で立つこともままならない。

そんな彼を、ニヤニヤと嗤いながら十数人の男たちが取り囲んでいた。手には金属バットやら鉄パイプと言った、不良ご用達の品々を携え……袋叩きと言わんばかりに、彼に対して散々な暴行を加えていたのだ。

「もうやめて！」

泣きわめきながら叫ぶのは、一人の少女。黒くしなやかな髪を伸ばした、眉目秀麗な美少女……悪鬼羅刹の、たった一人の幼馴染である。

「ああ？ ゴメンよ嬢ちゃん。コイツは少し先輩への礼儀を教えてやらないといけないみたいなんだ」

「そーそー。ま、今のところ君に害はないんだし、いいだろ？」

唾を吐きつつ、男たちは鉄パイプで悪鬼羅刹のみぞおちを殴り……バットで背を打ち。

悪鬼羅刹が血反吐を吐くたびに、嘲笑が起きていた。

「もうやめてよー！」

「しょう……こ……」

「やめてええええええええ！」

普段は絶対に出さないような、悲鳴。おとなしい彼女にとって、この光景はそれほどまでに痛ましかった。誰でもいいから助けて……そう何度願っただろうか。だが、その願いはその“何度目”かで、ようやく叶えられることとなる。

ドギヤアアアアン！！

「「「「「！？」「「「「「

破裂したように飛び散る、廃工場の引き戸。そのけたたましい音に、中に居た全員が振り向いた。

光とともに飛ぶように入ってきたのは、二人の少年だった。

「ここか……悪鬼羅刹の非公開処刑場ってのは」

「テメエは誰だ！？」

呟くように周りを見渡した長身痩躯の少年に、悪鬼羅刹を取り囲んでいたうちでもリーダー格の男が怒鳴る。すると、その男を少年は見据え……。

「見ねえ面だな……須川、女の子の救出は任せた」

「イヤッホー！ーウー！！」

「……空気を読めよ」

少女の救出を任された、チンピラのような風貌の少年は、満面の笑みで少女のほうへと駆け出す。

ほぼ全員が啞然とし、長身痩躯の少年は額を手で押さえつつ天井を仰いだ。

ついでに少女はおびえている。

「もう大丈夫だよ御嬢さん。僕が、守ってあげる!」

「キャラが違うだる須川……」

持っていたバタフライナイフで少女の縄を断ち切る、須川と呼ばれた少年。

長身瘦躯の少年のことなど、まるで意に介してもいなかった。

「んで。テメエらは俺のテリトリーで何やつちゃっててくれでんの?」

「ああ!? 文句あんのかよ!」

金属バットを床に叩きつけながら、長身瘦躯の少年によって来る鼻ピアスの不良。

対して彼は、そのボサついた黒髪をガシガシと搔いて、言った。

「大有り」

「!?!」

瞬間背後に回り込んだ少年は、思い切り男を蹴り飛ばす。5メートル近く吹っ飛び、男はそのままドラム缶の山に突っ込んだ。

「…… テメエまさか…… 死神刹那!?」

「…… なに……?」

二つ名とも思える名前に、反応したのは悪鬼羅刹。なぜなら、それは彼もよく聞く名前だったからだ。

この廃工場がある町の隣町、その最強を悪鬼羅刹とするならば、今居るここの最強が、目の前の少年死神刹那。出会ったことはなかったものの、お互いライバル意識はあったに違いない。

と、その悪鬼羅刹の目を睨み返すようにして見たあと、死神刹那
はまるで、獲物を見る目をして口を開く。

「まだ元気だろう悪鬼羅刹？ さすがに俺一人じゃあれ全員は面
倒だ。さつさと立てよ……共闘しようぜ？」

「……なんでだよ……？ ……まあいい。理由は後で聞かせてもら
うがここは……恩に着ておいてやる！」

「な！ コイツまだ動けるぞ！？」

「しぶとい野郎だ！ やれ！」

悪鬼羅刹が一人を殴り飛ばすと、死神刹那も呼応するように悪鬼
羅刹に迫る男を一人蹴り飛ばす。絶妙なコンビネーションで、次々と
敵を葬り去っていく。

「やるじゃねえか！ 悪鬼羅刹！」

「テメエもな！ 死神刹那！」

瞬間死神刹那の不意を打とうと、背後からバットを振りかぶる男。
それに悪鬼羅刹は足で救い上げた鉄パイプを投げることで牽制する。

「助かった、と言っておくか」

「避けたんだろう？ どうせ」

「まあな！」

笑みすらこぼれるようになってきた悪鬼羅刹の目端に、飛び込ん
できたのはとんでもない光景だった。

少女にナイフを突きつけようとする男が居たからだ。

「翔子！」

「ゲヘヘ、動くんじゃないぞ！？」

ニタリと嗤う男だが、悪鬼羅刹の隣で声がかかる。

「須川」

「はいよ！ 女の子に刃物を向ける愚物め！ 正義の鉄槌をくれてやる！」

「ぎゃああ！」

本当に鉄槌ならぬ金属バットを脳天から振り下ろした須川。

鈍い音がして、男は崩れ落ちる。と、そこでもう立っている者は……悪鬼羅刹、死神刹那、須川、翔子と呼ばれた少女を置いて居なくなつた。

ふう、と悪鬼羅刹はため息を吐き、翔子に駆け寄る。

「すまなかつた！ 大丈夫か！？」

「……………大丈夫。雄二が守ってくれたから」

「……………翔子！」

と、感動的な場面に、口笛が一つ。悪鬼羅刹が振り向くと、飄々とした表情の死神刹那と、握り拳を震わせ、嫉妬に狂った表情で悪鬼羅刹を睨む須川が居た。

その二人に対し、一度頭を下げる悪鬼羅刹。

「……………助かった。礼を言う」

「ああ、いいって。俺たちが好きでやったことだ」

笑う死神刹那に、彼はふと、顔を上げる。

「だが、なんでだ？ いや、助かったことには変わりないが、お前のメリットが見当たらない」

訝しそうな顔をする悪鬼羅刹に、死神刹那は手を振って言った。

「この廃工場で遊んでた仲間が、この連中に追い出されたらしくてな……泣きついてきたからお礼参りに来ただけだ。したら聞いた話じゃ、悪鬼羅刹の処刑なんて言うもんだからさ……オマエの面を拝みに来たっただけだよ、隣町最強サン？」

「……どうだろうな。まあ筋は通ってるし、実際俺も翔子も助かった。ありがとう」

「いいって。だが悪鬼羅刹……オマエ、頭いいだろ？」

「？ どうしてそう思う」

「まず利益を考える姿勢。それに基づいて俺の行動の意味を探り、自分の中で筋道を立てて考察。問題ないと思って今やっと警戒を解いた。オマエ、ただの喧嘩野郎じゃないな」

不敵な視線を寄越す死神刹那に、悪鬼羅刹は一瞬あっけにとられるが、すぐに笑みを返した。

「それは……お互いのようだな。死神刹那、テメエも相当やるみたいだ」

「それもお互い様だろうよ。今の共闘、楽しかったぜ」

「おいおい！ 俺を置いて話を進めるなよ！」

高みでお互いを探り合う二人にしびれを切らしたのか、須川が割って入る。すると翔子も同じく、会話に混ざるようにして、死神刹那に頭を下げた。

「……私たちを助けてくれてありがとう。私からも礼を言う」

「ああ気にすんな。それと、お礼はコイツに言ってやると喜ぶ。…

…無駄に」

そうやって彼は須川を前に突き出した。すると翔子は少し間を置いて。

「……ありがとう？」

[illegible]

うおおおお！ と吠える須川に、目を丸くする二人と苦笑する少年が一人。

「ま、こういうヤツだ。さて……悪鬼羅刹。改めて、死神刹那こと……橋本龍次だ。これからよろしく」

拳を悪鬼羅刹に突き出す死神刹那——橋本龍次。一瞬の時を待つて、悪鬼羅刹もその拳に自らのソレをぶつけて笑う。

「坂本雄二だ。よろしく頼むぜ」

これが、後に文月学園をこれでもかと引つ掻き回す二人…… A級戦犯”と“革命家”の出会いであった。

002 バカとは何たるか（前書き）

タイトル釣りもいいところ。

002 バカとは何たるか

問 以下の問いに答えなさい。

「調理の為にかける鍋を制作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい」

姫路瑞希の答え

問題点：マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険である。

合金の例：ジュラルミン

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っ掛け問題なのですが、姫路さんは引っかかりませんでしたね。

土屋の答え

問題点：ガス代を払っていなかったこと。

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え

合金の例：未来合金（↑すごく強い）

教師のコメント

すごく強いと言われても……

橋本龍次の答え

問題点：なぜつくったし
w
w
w

合金の例：ジュラルミン

教師のコメント

実習だったんですきつと。

@

「太陽が東から上り西に沈むのは、天ではなく地……つまり地球が動いているからだ」とガリレオ・ガリレイは提唱した。それはつまり、地球の自転について気づいた大いなる人類の進歩と言える」

「……」

「この時期にはまだ重力の概念がはつきりしていなかったため、哀しいかなガリレイの説は世間に拒絶され、彼は自らの論を曲げざるを得なくなってしまうた。だが、彼は言った。それでも地球は回っている」と

「……」

「その後ニュートンが重力、ひいては万有引力を証明したことにより、やっと地動説は世間に認知されるようになった。もつとも、それにもかなり時間はかかったが。それでもガリレイの意思は受け継がれ、今も生きていることだろう」

「……つまり、何が言いたい？」

「地球の自転が早すぎて遅刻しました」

ハア、と鉄人は盛大なため息を吐いて空を仰いだ。

「大仰に語ったつもりかもしれないが、地動説論者はガリレイの前にもたくさんいたわい。それに、そんな理由で遅刻になるわけがないだろうが……！」

鉄人が怒鳴るも、対して先ほどまで語っていた長身痩躯の少年——橋本龍次は肩を竦めるのみだ。その黒髪を掻き上げ、ふうと一つため息を吐いた。

「それで、俺はどのクラスなんです？」

「そう簡単に話を変えられると思うなよ？」

鉄人——西村宗一に対し、ここまでのうのうとくだらない弁論を繰り出せる人間は多くない。片手の指で足りてしまうほどだろう。だが、目の前の少年はそれをたやすく行っている。

鉄人ほどとまではいかないが、そのすらっとした身長。そして、

ある程度引き締まった体躯。

喧嘩をやらせたらかなり強いというのは、武に通じている鉄人だからこそはつきりとわかる。

まあ、それはともかく。

「まあいい。それは置いておくとしてもだ。貴様……なぜ今回に限って試験を受けなかった？」

一瞬、瞳に宿る光が鋭くなる鉄人、西村。

話が変わっていることに、本人は気づいているのだろうか。

「……Aクラスにこんなヤツが居たら、勉強の邪魔でしょう？」
「それは建前だろう？」

のらりくらりとかわそうとする龍次を、鉄人は一蹴する。
すると、龍次は笑って言った。

「学校で勉強するくらいなら、家で一人でやりますよ。せつかくこ
うして仲間が集まる場所に居る。そんな時くらい、遊んでいたいじ
やないですか。……一、学生としてね」

「勉強のために勉強をする勿れ……貴様は本当にそう思っているの
か」

「はい」

にこやかに笑う龍次。鉄人西村がつぶやいた言葉は、昨年龍次が
言った言葉であった。

“勉強のために勉強をする勿れ”

元々は古代中国の書物を漁っていた彼が偶然見つけた言葉である。

だが、彼はそれに惹かれたのだ。

だからこうして今を生きる。勉強のために勉強するんじゃない、誰かのために、自分の確定した将来のためにやろう。

彼はそう考えている。

「もういい、いけ。クラスは分かっているだろう?」

「はい。それじゃ、失礼します」

そう言って、龍次はのんびりまったりと学園へ入っていった。

@

クソボロい教室……まあ去年のうちに下見して、覚悟は決めてたからいいけどよ。

その引き戸をガラリと開くと、まず目に入っただのは俺の親友の姿だった。

「およ、雄二？」

「龍次！ 俺は来てくれると信じてたぜ？」

「ははっ！ お互い様だ」

なぜか教壇に立っていた雄二と、拳を突き合わせる。身長はさほど変わらないが、さすがに元悪鬼羅刹。体躯が俺なんかよりずつとがっしりしている。オマエ、プロテインとか飲んでるんじゃないか？

「にしても、お前なんで教卓に……ああ、お前もしかして」

「察しの通り、俺がFクラスの代表だ」

「狙ってやった、とか言わないだろうな？」

「さあな」

俺たちが笑いあっていると、そこにひょっこりと顔を出した少年が一人。見ない顔だが、純朴そうな少年だ。……バカっぽいとも言うが。

「雄二？ この人は？」

「ああ。コイツは龍次。俺の中学からの親友だ」

「俺にも紹介してくれ雄二」

「そうだな。龍次、こっちは文月学園を代表する、大馬鹿野郎だ」

「雄二い！ しっかり紹介しろお！」

「ああ、君が吉井明久か。俺は橋本龍次。龍次で構わない。これからよろしくな」

「あ、うんよろしくってアレ？　なんで通じてるの？」

首を傾げる吉井。コイツ、生まれてくる性別間違えたんじゃないだろうか。

それにしても雄二の対応といい、弄られキャラか。観察処分者だし。

「うん？　雄二はちゃんと紹介してくれたぜ？　大馬鹿野郎よしいあきひらって」

「雄二！　大馬鹿野郎と書いてルビを吉井明久にしたな！？」

「今更かよ……」

ため息を吐く雄二。うーん、これはもしかしていろんな意味でバカなのか吉井は。

「改めて、僕は吉井明久。明久でいいよ」

「おう」

吉井改め明久と親交を深めていたところで、鐘が鳴る。

「ところで雄二。席はどうすればいいんだ？」

「ああ、適当でいいみたいだ」

「把握した」

もつとも席とは言えないような座布団どもだが、この際仕方がない。俺は適当な空席を見つけて座ることにした。

「……お主、なんでここにおるのじゃ？」

「？　ああ、誰かと思ったら秀吉か」

右隣で台本を熟読していた両性類。

「……失礼なことを考えなかったかの？」

「いや、気のせいだ」

「それはよい。質問に答えてくれんかの？」

「ああそうだったな。楽しみたいから。ダメか？」

秀吉は、俺の学力的な問題を上げているのだろう。コイツとは同じクラスになったわけでもないのだが、一年の時にコイツの姉貴とクラスは一緒だ。それ繋がりでできた友達である。

「楽しみたいから……姉上が聞いたら悲しむかもしれないのう」

「優子が？　なんで？」

「……ハア」

本日何度目かのため息いただきました！。

「帰ったら姉上を慰めるのに苦労しそうじゃ……お？」

「あん？」

そんな時、引き戸が開いて幸薄そうな先生が入ってきた。担任かな？

いつの間にか、そろそろ生徒も入ってきていたようだ。俺が来たときにはまだ、ほかの連中は外に居たのにな。

自己紹介の時間になった。

まず、俺の隣の秀吉から始まり、ムツツリ商会の土屋（もつとも、自分では言わなかったが）や明久を殴ることが趣味だと言う島田、そしてなんと愛すべきミスター女好き須川。

なかなかアクの強いメンバーが集まったことに苦笑していた時。遅れました！ と飛び込んできたのは姫路だった。

「およ？ 姫路？」

「橋本くん……？」

お互いの目が、なぜここに？ だった。と、そこで注目を集めてしまったのか、どよどよ質問の嵐。

「なんで二人がここに居るんですか？」

まあ、そんな質問が大半だった。……うん？ 明久の目が姫路にくぎ付けか……姫路モテるからな。

姫路はどうやら、試験中に熱を出して倒れたらしい。それを介抱したのが明久、と。なるほどな。元々からだの弱い姫路だ。体調不良は良くあったが……まあ仕方ないといえば仕方ないか。

と、そこで雄二がこちらに来て、姫路に自己紹介。

「代表の坂本だ。明久が不細工ですまん」

おお、だしぬけに何を言うかと思えば。

「え、そんな……吉井君は不細工じゃありませんよ？」

……ほほう。わたたと弁解するあたり、これはもしかすと……。

「って違います！ 橋本君がどうしてここに？ 学年主席ですよ」

「なに？！」

驚かれた。

「いや、学年最下位タイだろうよ。俺はテストを放棄してる」

「……そうなんですか？ もったいないですけど、橋本君のことで
すから自分の楽しめる場所ってことでしょうね」

苦笑を浮かべる姫路に笑って頷いていた時だった。

「はいはい静かにしてください」

ガラガラ。

ものの見事に教卓が崩れる。

代替品を取りにいった担任を後目に、明久が俺と雄二を呼びつけ、
立ち上がった。

どうしたんだ？

003 やってやるか

「どうした明久、俺たちをこんなところに連れ出して」

雄二が後頭部を掻きながらそう言った。

こんなところとはいっても廊下なわけだが、明久は何か躊躇ののち、こう切り出した。

「二人は、親友なんだよね？」

「あん？ まあ俺はそう思ってるが……どうよ雄二」

「聞くまでもないだろうが。それが？」

うれしいこと言ってくれるじゃんかよ雄二。オマエとはこれからもずっと親友でいたい。

それを聞いた明久は俺たちに向けて勢いよく頭を下げた。

「二人の力で試験召喚戦争をやってくれ！」

……はっはーん。

これは、考えるまでもなく姫路のためか。なるほど？ お前はなかなか良いヤツだな。

横の雄二を見ると、同じ考えに至ったのだろう。ニヤニヤ笑っている。

「つまり、姫路の為だろ？」

「そっそっという訳じゃないけど……でも、姫路さんには酷い環境だから、改善してあげたいって気持ちはある」

ストレートな雄二の発言に、しどろもどろになる明久。

まあ雄二、そんなにいじめてやるなよ。

「いいじゃねえか。元々試召戦争はやる気満々だったんだしよ」

後頭部に腕を組みながら、俺は明久に助け船を出すことにした。
すると彼は首を傾げ、雄二の笑みは深くなる。

「どういうこと？」

「ハッ……そうだ明久。学年一位のコイツのモットー、知ってるか？
学園長に正面からそう言っつて、大問題になった言葉なんだが」

雄二の言葉に、明久は首を振った。それに合わせるようにして、
雄二は続ける。

「勉強のために勉強をする勿れ……ようは、勉強のために勉強する
なんてアホらしいだろ？　って言葉だ。だから……」

「俺はFクラスに来たんだ。誰かのため……自分の歩む道のため……
……そんな風に考えながら勉強したいじゃないか。ま、本当は雄二が
頭下げてきたからなんだけどさ」

「おま……ソレは言わなくてよかるうに」

ハア、とため息を吐く雄二。学年末試験の前日、夜中に俺の家に
来た雄二はこう言った。

『俺と一緒に、勉強がすべてじゃないって証明してくれ！』

……思考回路が似てんだよな、俺と雄二は。

「それって確か、“革命家”が言っただってアレ？」

「そう、龍次がその“革命家”だ」

文月学園にはいろんな二つ名が溢れている。明久だって“観察処分者”じゃなかったか？

俺の革命家は、ちよっとした細工が召喚獣にされるわけだが……まあアレくらい構わないさ。

「そうだったんだ！　ってことは本当に試召戦争は……」

「ああ、俺と雄二でこの学園をひっくり返してやる」

「そこにお前の名前も加えてやるさ」

雄二が推すほどか。明久って、なかなか見どころある奴なのかな。

「つと、先生きたし、入るぞ」

「そうだな」

「ありがとう二人とも」

「何、気にするなよ」

教室に入ると、まだ終わっていない者の自己紹介が始まった。さて、我らが代表……意気込みを見せてもらおうか。

「代表の坂本雄二だ。さて、俺たちがこの体たらくに比べて、Aクラスは冷暖房完備のシステムデスクらしいが……不満はないか？」

「……」

「というわけで、Fクラスは、Aクラスに“試験召喚戦争”を仕掛けようと思う」

おお、いきなり啖呵切りやがった。なかなかやるなあオマエ。周りはいきなりの提案に戸惑いを隠せないようだ。

「そんなの勝てるわけがない！」
「無理だ！」

なるほどな……まあそりゃそうだ。
これ以上の設備ダウンは勘弁だし、そういった意味では無理難題というのも当たり前。

なんせ最下位クラスが最上位クラスに仕掛けようというんだ、戦力差も半端ではない。

「皆がそう思うのも無理もない。だがこのクラスには、勝てる要素が揃っているからこそその発案だ。今からそれを説明してやる」

そんな中、雄二はそんなことをのたまいやがった。相変わらず、お前の話術には敬服するよ。

「おい、康太。いつまでも姫路のスカートの中をのぞいてないで、前に出てこい」

「……………！！（ブンブン）」
「は、はわ！？」

慌ててスカートを抑える姫路と、必死に行動を否定する土屋。

「コイツが、かの有名なムッツリー二だ」
「……………！！（ブンブン）」

有名だな、確かに。女子からは軽蔑の対象としてかなり上位にランクされているし、逆に男子からはもう拝み倒されるほどの男だ。正体は謎……なんて言ってたが、いつかに雄二が普通に彼をムッツリー二と呼んでいたのを知っていた。

「バカな、奴がそうだと言うのか？」

「だが見る、いまだ必死に手で押さえて隠そうとしてるぞ？」

「ああ、ムツツリの名に恥じない姿だ」

「……………！！（ブンブン）」

ここまで神聖視されてまだ否定か。やるな、アイツ。
すると、次に雄二の視線が姫路に移る。

「姫路のことは、言うまでもないだろう」

「え！？ わ、私ですか！？」

「ああ、主戦力だ。期待している」

ほほ笑む雄二に、周りもざわめく。

「そうだ、俺達には姫路さんが居るんだった！」

「彼女なら、Aクラスにも引けを取らない」

「ああ。彼女が居れば何もいらない」

「木下秀吉だっているし、俺も当然全力を尽くす」

次に、演劇部のホープであり、優子の弟である秀吉を上げ……そして自身もまた、代表として名乗りを上げる。うーん、やっぱり話術がうまいなあ。

「坂本って、確か小学生のころは神童とか呼ばれてなかったか？」

「それじゃあ、実力はAクラスレベルが2人も居るってことかよ？
もしかしたら、やれるんじゃないか？」

「ああ、なんかやれそうな気がしてきた！」

なんていう風に士気は確実に上がっていき、ほぼ全員やる気が出始めている。

そこへ雄二の一言。

「吉井明久だっている」

ざわざわ。

「誰だそいつ」

「さあ、しらん」

「みんなよく聞け。吉井明久の肩書は、観察処分者だ！」

「雄二！ せつかく上がっていた士気を、僕で落とすなんてあんまりじゃないか！」

ギャーギャーわめく明久を無視して、雄二の発言に対する波紋は広がっていく。

「確か観察処分者って「馬鹿の代名詞」じゃなかったっけ？」

「ちっ違っよ！！ちよっとお茶目な16歳の愛称で・・・」

明久は慌てて否定するが、雄二は頷く。

「そっだ『馬鹿の代名詞』だ」

「肯定するなバカ雄二！！」

「あのそれってどういうものなんですか？」

そんな中、姫路が手を上げて雄二に問いかける。

「観察処分者っていうのは具体的には教師の雑用係だな。力仕事とかの雑用を特例として物に触れるようになった召喚獣でこなすんだ」

「へえ、凄いですね！」

「あはは。そんな大したものじゃないよ。確かに僕なんかの点数で

も召喚獣の力はかなり強いけど、

その時受ける召喚獣の負担の何割かは僕にフィードバックされるんだ。皆と同じで教師の監視下でしか呼び出せないし、僕にメリックもないしね」

「おいおい・・・じゃあ召喚獣がやられたら本人も苦しいって事だろ？」

「だよな・・・それならおいそれと召喚できないヤツがいるって事じゃん」

ダダ下がりになる土気。雄二オマエまさか、コイツ陥れるだけのためにこれやったんじゃないよな？

「気にするな！明久はいてもいなくても大して変わらん雑魚だ」

やべえ。懸念は事実になった。

「・・・雄二そこは僕をフォローするところだよな」

さめざめと泣く明久に、姫路と秀吉が必死でフォローを入れていた。

と、そこで雄二が、妙にいい笑顔でこちらを向く。

「じゃあ……真打登場してもらおうか。龍次！」

「あいさー、雄二」

俺が立ち上がって雄二の横へ行くと、全員の視線が俺に集まる。

「さてお前ら。コイツのことは、知ってるか？」

そう問いかけると、大体頷いたヤツと首を傾げてるヤツが半々か

…… っておい！ 須川なんで首傾げてんだよてめえ！

「しらねえな、誰だ」

「須川！？ マブダチだよなあ！？」

「いや、初対面でマブダチとか言われても……」

あくまでふざけ倒そうとする須川…… いいだろう。

「そ、か。悪かったな。それじゃあもう美央みおのことは忘れると」

「あああああああああ！ 嘘です！ 嘘！ 俺がマブダチを忘れるわけないじゃないか！！」

俺の妹のことだが…… まあ割愛。

雄二が口を開く。

「コイツは、“元学年主席”、通称、教師に逆らった“革命家”だ」

「……！？」

「学年末以外での成績を学年トップでいたにも関わらず、勉強のために勉強するのが嫌だからと振り分け試験をボイコット。おまけにその時学園長に呼び出され、あまつさえその学園長を論破した化け物だ」

「おいおい、そこまで言うかフツ」

ため息を吐く俺。

「俺とコイツ……そしてさっきまで紹介したメンバーが居るんだ、俺たちは強い！」

「……おお！」「……」

「俺たちはAクラスに、試召戦争を仕掛ける！」

「……おおおおおおお！！」「……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5759z/>

バカとテストと召喚獣～死神刹那の学園生活～

2011年12月20日05時15分発行